

## 論文

## 日语现象句在汉语语篇中的表达方式

— 以日汉对照读物《海洋》为例 —

鄭 高 咏

## 要 旨

日本語における〈文法論的文章論〉理論の代表者、永野賢氏の研究によると、日本語の文は主語の有無によって有主語文と無主語文に分れ、有主語文は現象文と判断文とに分れる。さらに永野氏は文章における現象文の役割について、「新しい事象を読み手に提示するという役割をもつものである。文脈の上では、主語に力点がかかる。すなわち、叙述の流れにおいて新出の事象を示す役割を担当するのが現象文である。新出という意味は、実際上新しく出てくるというほかに、主語に力点を置こうという意味合いもあるわけで、その文に関する限り、主語のほうに叙述の力点が置かれるという機能を果たす」と主張している。本拙論では、『海洋』（全127頁）という日中対訳書を調査資料とし、すべての現象文を抽出して、中国語に訳すときの類型によって分類し、日本語の現象文が中国語ではどのように表現されているかについて文法の角度から分析し、さらに全体の文章におけるそれぞれの現象文の実態について詳しく考察した。その結果、次のようなことが判明した。すなわち、SV形式をとる日本語の現象文を中国語に訳すと、その多くがVO形式に変化することである。おそらくそれは、文における叙述の焦点が中国語では文の後ろにあることによるものと思われる。文の構造を中心とする立場から、主語・述語・賓語・補語・限定語・状況語の重要度を捉えた場合、主語と述語の重要度は賓語と補語よりも大きく、賓語と補語の重要度は限定語と状況語よりも大きいと考えられるが、“表意重心”の角度から見

た場合、述語の重要度は主語よりも大きく、賓語と補語の重要度は述語よりも大きく、限定語と状況語の重要度は賓語・補語よりも大きいと考えられるのである。ただし、「偏正複文」などのように一概にそうとは言えない場合や、“就”などの虚詞や多彩な標点符号の使用により、文における叙述の力点に変化がもたらされる場合があるなど、例外も見られる。そのような実態を踏まえ、筆者は中国語文章における「主要叙述対象」を分析するにあたっては、次のような手順で行うことを提案する。まず、文章全体構造の角度から文と文の間における主・述関係を分析し、それから各文における主・述関係及びそれぞれの“表意重心”について分析する、という手順である。このような分析を通して、中国語の特徴に応じた中国語の文法論的文章論という理論の構築に新たな前進があるものと考えている。

キーワード：現象文、叙述力点、SV→VO、指示代名詞による“複指”

## 一 語法文章学对现象句的定义

日语语法文章学理论代表永野贤先生按照主语的有无将句子分为有主句和无主句，有主句中使用「が」作主语的句子称为「现象句」<sup>1</sup>，并阐述了现象句在文章中的作用：

現象文は、新しい事象を読み手に提示するという役割をもつものである。文脈の上では、主語に力点がかかる。すなわち、叙述の流れにおいて新出の事象を示す役割を担当するのが現象文である。新出という意味は、実際上新しく出てくるというほかに、主語に力点を置こうという意味合いもあるわけで、その文に関する限り、主語のほうに叙述の力点が置かれるという機能を果たす、これが現象文の役割である。

永野贤认为，「现象句」的作用是将新信息提供给读者，句子重点在主语部分；「判断句」的作用是将已知信息、一般性命题以及用提示语提出的事物作为话题提出，并对该话题进行论述，其叙述重点在谓语上；「谓语句」是指不需要事象主体的句子，将事象作为事象进行叙述；「准判断句」是承前省略主语的句子，根据前文主语，后面的句子在语言形式上省略了主语，仅用谓语进行陈述，该类句子在文章叙述中起着很大的作用。

永野贤在具体分析现象句在论说文中的作用时指出：

現象文は主語が強調されるという特質をもつ。筆者は論を進めるにあたってポイントとなるべき事柄を現象文の主格主語で強調し、それをふまえて次の小主題を設定することにより、論

旨の流れを鮮明にしようとするわけである。

也就是说,在以使用判断句为主的论说文中,那些为数不多的现象句,在文章中发挥着其特有的语法特性,使论点突出,条理清晰。

## 二 对日汉论说文现象句的语法语用对照分析

笔者曾在2002年的有关论文中<sup>2</sup>对日汉论说文<sup>3</sup>主语进行过初步的对比研究,结果表明;日语主格主语「现象句」在论说文中的作用是,对确立文中小题目提供必要的事实资料,它是论述的核心。这类句子译成汉语时很多译为“存现句”、“有字句”,还有一部分译为“把字句”,或着添加代词、介词、连词、副词,有的是在相关词语后面加上逗号,以达到强调的作用。然而,汉语不同于日语,它在语言表达形式上没有与「は」和「が」等同的助词,这些句子,特别是对在文章中起着论述核心作用的「が」的主语句子,在译成汉语时是如何表达的,需要我们作进一步的观察和分析。正如永野贤指出的那样,日语「现象句」在论说文中用例较少,但因为它有强调主语的作用,所以作者把论述中应强调的事象以现象句的形式对主格主语进行强调,在此基础上设定下一个小主题。那么,这些为数不多的、起着重要作用的现象句,译成汉语时又是如何表达的呢?明确这一点,是构筑符合汉语规范的语法文章学理论框架的关键。

为了更加全面地了解论说文中日语现象句译成汉语后的表达形式,笔者选择了商务印书馆出版的日汉对照读物《海洋》<sup>4</sup>。该书共分24个章节,日语原文1~95页,汉语译文96~127页。由于篇幅的关系,不转载原文和译文,请参阅原著。

该篇文章中的日语原文,在总数为374个的句子中共使用了53个现象句,占全文的百分之十六,以判断句、谓语句作为文章的主要基调,这也是论说文的一大特点。我们按照文章中的顺序进行罗列,结合上下文从日汉对比的角度给予探讨。

1. ふつうの人間の到達し得ないのが海をいっそう不思議なものにする。

(再往下)一般人难以再到达,这使人对大海更加不可思议。

2. このように、海についてそれからそれへと思いをめぐらし、海とはいったい何だろうかと考えていくと、まず、海が存在そのものがもっとも大きな謎として浮び上がってくるのである。

这样,当我们不断地思索着大海,一想到海究竟是什么的时候,首先,大海的存在本身就会作为一个最大的谜浮现在我们脑海里。

3. また逆に、地球の温度が急に100度ぐらい上昇したと仮定すると、海水はたちまち蒸発して、海底は露出して、一般の地上とかわらない山脈や谷が表われてくる。

反之,假如地球上的温度一下子上升一百度左右的话,那么海水就会立即蒸发,海底就要显露出来,呈现出和一般陆地一样的山脉和峡谷。

4. こう考えると、地球が現在の軌道を持っていることが海が存在を可能にしているのである。

由此看来，正是因为地球按现在的轨道运行才使海洋得以存在。

5. 本州の太平洋岸と日本海岸を比べると、太平洋岸の黒潮のほうが規模の大きい暖流であるが、かなり沖合を流れるのに対して、細い対馬海流は岸の近くを通るため、同じ緯度の場合、太平洋岸の方が日本海岸より気温が低い。

比较本州的太平洋海岸和日本海岸可以看出，流动在太平洋海岸的黑潮是一条巨大的暖流，而细小的对马海流是在海岸附近流动，所以在同一纬度下，太平洋海岸比日本海岸的气温低。

6. これが氷河時代であり、氷河が数百メートルもできると、海面が下って、海流を不活発にし、再び北極海が凍結するという説がある。

(省略) 这就是冰河时代。有一种说法是，当冰河厚达几百米时，海面下沉，海流的流动变慢，北冰洋将再次冻结。

7. 太陽の近くで、でき上りかかっていたいくつかの惑星は、太陽からの熱線などで、まわりをとりまいていた気体を取り除かれ、何億年の間に、惑星自身が太陽熱を吸収して熱球となり、あるいは灼熱のガス体となり、結局、中心の部分だけが残って、現在の惑星となったというのが、宇宙塵説の骨格である。

在太阳附近，将要形成的几个行星由于周围环绕的气体因太阳散发出的热量而消失，在几亿年的时间里，由于行星本身吸收太阳的热量，自身变成了热球，或灼热的气体，最后只剩下了中心部分，变成了今天的行星。这就是宇宙尘学说的基本论点。

8. この水蒸気が、地球の重力によって引きとめられ、地球をとり巻く蒸気の層となって滞留したことが、やがて海をつくり出す元となったのであろう。

这些水蒸气受地球的引力吸引，成为环绕地球的蒸气层而停留在地球周围，不久以后变成了形成大海的本源。

9. 最近の海底調査によって大西洋中央海嶺が発見されたが、その海嶺はヒラヤ山脈やアルプス山脈のような地上の山脈と違って、山脈の稜線に当る部分に幅数十キロの大きな割れ目を持っていることがわかり、山脈は事実上、この幅広い、深さ一五〇〇メートル以上にもなる割れ目によって、二すじに引き裂かれていることが判明した。

通过最近的海底调查，发现了大西洋中部的海底山脉，并判明这些海底山脉与喜马拉雅山脉、阿尔卑斯山脉那样的陆地山脉不同，它们的山脊处有几十公里宽的大裂缝，山脉被很宽的、深达一千五百米以上的裂缝分裂成两个山脊。

10. この発見は海のでき方を決める上で極めて重要な発見であり、ここで一たんは葬り去られた、ヴェーゲナーの大陸移動説が再び息を吹きかえすことになるかもしれないのである。

这在确定海的形成方面是个重大发现。曾一度被遗弃的威格纳大陆漂移说有可能获得新生。

11. けれども、いま、地球上からすべての海水を取り除いてしまうと、もともと陸地の高いところと海底だった低いところとの差はあるにせよ、海岸線といった区別はなくなって地球の表面全体が山あり、谷ありという露出した状態になる。この海水を取り除いた表面が地殻の表面であって、地球の皮である。

现在如果从地球上排走所有的海水，尽管陆地和海底有高低之差，但却不会有海岸线，整个地球表面呈现出有山有谷的状态。这个排走海水的表面就是地壳，也就是地球的表层。

12. いまマントルの上に漂う皮に裂け目ができて、その裂け目が広がったとすると、その両側にある二つの点は当然距離が遠くなる。

如今浮在壁炉层上面的表层出现了裂缝，假如裂缝扩大，其两侧之间自然就拉开了距离。

13. 高温で液体となっているマントルは、対流によって温度が高く密度が小さくなると表面近くに上昇し、そこで冷やされて下降するが、その表面にきたとき、海嶺の割れ目から一部分が溢れ、海嶺の幅を広げ、海底の地殻を動かし、海嶺の両側にある大陸間の幅を広げていくという考えが、どうやら支持されようとしている。

在高温下形成的液体壁炉层由于对流，温度变高，密度变小，就会上升到表面附近。虽然在那里冷却之后下降，但在其到达表面时，会从海底山脉的裂缝中溢出来一部分，从而加大了海底山脉裂缝的宽度，使海底地壳发生运动，扩大了海底山脉两侧大陆间的宽度，这种说法似乎能得到支持。

14. けれども一つの区域だけに、低気圧の影響などで強い風が発生し、これがはげしく海面にぶつかる、海面に細かい凹凸を生じさせる、これが波であって、いったん強く押されて低くなった海面はすぐ元に戻るため、そこが山となって周辺は谷となる。風が強くなればなるほどこの山と谷の差は大きくなって、波が大きくなる。

如果只在一个区域里，由于受低气压等的影响产生强风，猛烈地吹向海面时，会使海面产生细长的凹凸现象，这就是波浪。一旦受到强烈的压力，降低的海面马上就恢复原状，那儿就形成波峰，周围就形成了波谷。风力越强，波峰与波谷之差就越大，波浪也就大起来。

15. 砂浜の斜度によって、波がしらが泡立って広く崩れる場合と、波がしらが前に出て巻きながら崩れる場合の二通りがある。

由于沙滩坡度的不同，波峰有两种消失方式，一是波峰变成泡沫向四处扩散；一是波峰向前伸去，一边向回翻卷一边消失。

16. 海の水が、陸上の川のように一定方向に流れる海流や、風の力によって表面を動かされる波のほか、世界中の全部の海水が、あつちにひっぱられたり、こつちにひっぱられたり、間断なく動いている現象がある。これは潮の満ち干、あるいは潮汐と呼ばれる現象で、膨大な海水をひとまとめにしてひっぱっている怪力の持ち主は、一つは月であり、一つは太陽であるが、地球上の海水を引っ張る力だけに関していえば、月の方が遥かに力持ちである。

世界上所有的海水，除了象陆地上河流那样朝一个方向流动的海流和因风力而产生海面运动的波浪以外，都具有被拉过来拖过去的不断运动的现象。这种现象叫做涨潮和落潮，或叫潮汐。具有将浩瀚的海水收拢的怪力的，一个是月球，一个是太阳。如果只从吸引地球上海水的引力来说，月亮的吸引力是相当大的。

17. 太陽の周囲に一定の軌道をもってまわっている惑星のうち、火星、木星、土星、海王星などには、その惑星のさらに外側をまわっている小さな天体があることが知られている。

我们知道，在太阳周围按固定轨道运行的火星、木星、海王星等行星中，也有围绕着它们旋转的小天体，这些小天体分别叫做各自行星的卫星或月球。

18. これが満ち潮で、月と直角に向かっている面の海水はその分だけ水面が低くなって、当然引く潮となっている。

(前略)，这就是涨潮。与月球成直角那面的海水，水面也相应地降低，不用说，这就是退潮。

19. 物語や記録によれば、いまから二四〇〇年も前にギリシャの歴史家が、海の深さを測る方法を書き

残しているし、二〇〇〇年前にはポセイドニオスによって、地中海のサルジニア島付近で一八二九メートルの水深を測定したといわれているが、その時代以降、つい五十年ほど前までは、綱におもりをつけて海の深さを測るという方法が水深測定の唯一の方法であった。

据传说和文字记载，早在两千四百年前，希腊的历史学家就记述过探测海水深度的方法。（省略）

20. 大陸のへりから沖合い数十キロまでの海底は比較的浅く、傾斜も緩やかであるが、深さ二〇〇メートルあたりから急な斜面となつて、深さ数千メートルの深海につらなっているのが、だいたいの海底の姿であることがわかつた。

大体情况是，从大陆边缘到海面几十公里的地方，海底比较浅，倾斜也不大，而从大约水深二十多米的地方开始变成陡坡，和几千米的深海连在一起。

21. つまり岸に近いところがいちばん浅く、岸から遠ざかるにしたがつて深くなり岸からもっとも遠い中央の部分がいちばん深くなっているのがふつうである。

即离岸近的地方最浅，随着远离岸边也就变得深了，离岸最远的湖中心通常是最深的。

22. しかしシルリア紀の中頃から、地上で新たな生活を始めた植物が現われた。

从志留纪中期开始，出现了在陆地上进行新生活的植物。

23. もちろん孢子で繁殖する下等な植物であるが、陸に生活するために、水を体内に送り届ける管を持ったのがもっとも大きな変化であつた。

当然这些都还是靠孢子繁殖的低等植物，但为了能在陆地生存，已有了把水送进体内的管子，这是个很大的变化。

24. このサソリと、足の数の多いヤスデなどが、海水中の生活から、空気中の酸素を吸う生活に切り替えた最初の動物だつたろう。

这些蝎子和多足的香延虫等恐怕是从海水生活变成呼吸空气中的氧气生活的最早的动物。

25. この日本の「はえなわ」を一九五一年、アメリカの調査船が水産資源保護のため調べたことがあつた。一九五一年，为了保护水产资源，美国调查船曾对日本的“延绳捕鱼”作过调查，地点是在太平洋中部。

26. この海流は、これを発見し研究した学者の榮譽を記念して、現在クロムウェル海流と呼ばれているが、これは、長さ五〇〇〇キロメートル以上、時速八キロぐらいの速度で流れていることがわかつた。

为了纪念发现和研究这条海流的学者，这条海流被称为克劳威尔海流。同时还弄清了这条海流长五千多公里，以八公里左右的时速流动。

27. その結果、一九五七年から一九五八年にかけての国際地球観測年には大規模な共同調査が行われ、メキシコ湾流の流路の二〇〇〇ないし三〇〇〇メートルの深さの深海にも、湾流とは逆の方向に流れている深海海流が見つかったのを初め、各所でいろいろな深海が発見された。

在一九五七年到一九五八年的国际地球观测年期间，进行了大规模的联合调查，结果发现墨西哥湾流经过的二千～三千米的深海里也有和湾流成相反方向流动的深海海流以及其它地方的深海海流。

28. そして二匹が三匹になり、五匹になり一〇匹になり、体長一四ミリメートルに達すると完全に統制のとれた群れができ上がるのである。

当身长超过十厘米时，两条鱼就象一条鱼一样形影不离，开始有集群的苗头，由两条鱼发展成三条，



## 日语现象句在汉语语篇中的表达方式

五条,十条,当长到十四厘米长时,一个有完全统制的鱼群就形成了。

29. つまり仲間どうしの離れから始まって互いに相手と一緒に行動をとろうとする本能が存在するらしい。

也就是说,它们看起来似乎是有这样一种本能,从伙伴的分离开始就想同对方采取共同行动。

30. ごつごつした岩礁があり,潮の満ち引きがあり,波があり,また各種の海藻の茂みがある。

那里有凸凹不平的岩礁,有潮水的涨落,还有波浪以及各种茂密的海藻。

31. 事実,昼間でも,厚い雲に閉されて,海面が暗くなっていると,カイアシ類の浮き上がってくるのが見られる。

事实上,即使在白天有厚厚的云层笼罩,海面变得很暗时,也能看到腹足类上浮。

32. 空気中で音を発しても,水中のサカナは何の反応も示さないが,同じ音を水中で出すと,サカナの群れにいろいろの反応や混乱が生じる。

(鲷这种鱼是集成大群游动的鱼,它们一听到不同的声音就会迅速集合起来,形成球状的鱼群,)尽管空气中发出的声音对水中的鱼类没有任何反应,但同样的声音如果在水中发出时,鱼群中就会产生各种各样的反应和混乱。

33. これが視覚以外に,水の動きを感じるからである。

这是因为除了视觉之外,鱼类还能感觉到水的运动。

34. サカナの耳は,中耳も鼓膜もなく,かんたんな内耳だけで性能はよくないが,腹部の両側にある水流をとらえる側線という感覚器官が極めて鋭敏である。

虽然耳的功能不好,但腹部两侧感觉水流的侧线这一感觉器官却极其敏锐。

35. カマスに餌づけをして,一定の場所にたくさんのカマスが集まるようにしておき,あるときそのうちの一匹に傷をつけて放したという実験がある。

有这样一个实验,即向油鲈投放饵料,使众多的油鲈聚集在选定的地方,这时,把其中的一条鱼弄伤后再放回去。

36. しかし,そんなことよりむしろ,陸上ならばわれわれ自身がそれほどの困難もなくどこでも歩けるのにたいして,海の中は自由に歩くどころか,相当な潜水装置を身につけても,海の世界のほんの一部しか歩くことができないことが大きな障害となっている。

但与其如此,倒还不如在陆地上方便,如果是在陆地,倒没有那么多困难,我们可以到处行走。而在海里,不但不能自由行走,就是穿着相当不错的潜水衣也只能在大海世界的极小部分活动,这是个很大的障碍。

37. けれども海は陸の二倍以上の面積を持ち,陸上の最高点の高さより,海底の最低点の深さのほうが深く,海面上の陸の容積と,海水の総容積とをくらべたら,後者の方がはるかに大きい。

大海的面积是陆地的两倍之多,海底最低点的深度超过陆地最高点的高度,如果比较海面上陆地容积和海水的总容积,可以看出后者是相当大的。

38. 海底面には広面積にわたり,かなりの厚い層で砂や砂利が堆積しており,船上からのドレッジ,つまり船から下ろした機械で海底を掻くだけで多量に採取することが可能なものがある。

海底有很大面积堆积着厚厚的一层细砂或小圆石子,利用船上的挖泥机,也就是说只要用从船上放

下来的机械抓挠海底，就能挖掘出大量的沙石。

39. そう考えると、地球の陸地で人間が人間らしい生活をするために、現在の人口の二倍、八〇億人程度が限界であろうという説が有力であり、もっと少ない方が適当と考えている人もある。

由此看来，人类要想在地球的陆地上进行适合人类的生活，地球上的人口就不能超过现在人口的两倍，即八十亿人口，这种说法是有说服力的。

40. 生活上、とくに不都合なことは報告されていないが、宇宙飛行と同様、このような小規模な実験をくり返し行ない、細部にわたって点検しながら、その都度改良を加え、海底生活の可能性が探られているのが現在の段階である。

(一九七三年、日本根据西托比亚计划进行了海底生活实验，四名研究所的工作人员在骏河湾深五十米的海底试住了整整两天，)虽然在生活上没有发现什么特别不适应，但和宇宙飞行一样，目前还是一边反复进行小规模实验，一边对细节进行检查和改进，探索海底生活的可能性的阶段。

41. 地球はご存知のように、極半径と赤道半径の長さはわずかに違いますが、ほぼ球形であり、その上に海や陸が分布している。

正如大家所知，地球极半径和赤道半径的长度仅差一点点，地球大致是球型，上面分布着海洋和陆地。

42. 宇宙から地球を撮影した写真が連続と送られてくるようになり、そして一九六一年四月十二日には、ソ連のガガーリン宇宙飛行士が、地球外から地球の全貌を眺めた最初の人人となり、写真でなくて、肉眼で地球そのものを見ることができたのである。

从宇宙空间拍下来的照片不断地传到地面，而且，在一九六一年四月十二日，苏联宇航员加加林成了第一个在地球外眺望地球全貌的人，也就是说，不是从照片上，而是亲眼看到地球本身。

43. 陸地は赤く輝き、海は青黒く見え、陸と海との境界は部分的に明らかに見えたと、それよりも、雲のある部分と、雲のない部分のモザイク模様がはるかにはっきりと見え写真に写ったのである。

(真正的地球并不是象我们看到的陆地、大海界限分明的地球仪那样，)陆地发红色，海洋是蓝的，陆地和海洋的界限部分地方较明显，倒是有云的地方和无云的地方组成的网状花纹看得特别清楚，并拍成了照片。

44. したがって、地球の外から見た地球の表面は、雲が点在し、あるいは層となり、ときには広大な区域を占め、雲のない部分を通してのみ、陸や海が見えるのである。

因此，在地球之外看到的地球表面总是漂着云片，有时形成云层，覆盖着很大面积。只有通过无云的地方才能看到陆地和海洋。

45. 海があれば必ず雲がある。

有海洋就必定会有云。

46. 太陽のすばらしい熱エネルギーが、水蒸気という形で海の水を何億トンも持ち上げ、上空に送り届けてくる。

太阳巨大的热能以水蒸气的形式把几亿吨的海水蒸发后带到空中，(水蒸气变成云漂浮在空间，不久变成雨、雪，有时还引起暴风雨重返地球表面。)

47. この水が地下水、川という順序を経て再び海に帰ってくるが、海を源とするこの地球上の循環水が、すべての生命を養っている。

这些水按地下水、河水的顺序再次返回大海。地球上以海为源的循环水养育着所有的生命。



48. 地球と比較的よく似た星が二つある。

有两个星球与地球相似，一个是火星，一个是月球。

49. 重力がもし非常に小さいと、水の分子を引きつけておくことが不可能になり、海をつくりあげている水の分子は、地球から飛び出して宇宙空間へ散り散りになって拡散してしまう。

如果重力非常小，不能吸住水分子，组成海水的水分子会从地球上飞起，扩散到宇宙空间。

50. 一九三八年の暮，南アフリカのイーストロンドン港に入港した漁船の中に，一匹の奇妙なサカナが積まれていた。

一九三八年年末，进入南非东伦敦港的渔船上有一条奇怪的鱼。

51. 陸上の生物は全体として緑色植物が基礎となっており，地上の大部分を緑色植物がおおっている。

陆地上的生物，从整体来看，是以绿色植物为基础的。绿色植物覆盖着大部分地面。

52. そして，動植物の遺体や排出物を分解処理して，植物が吸収しやすい状態や無機物に変える働きをしているのが「分解者」である。

而具有分解处理动植物的遗体和排泄物，使之变成植物容易吸收的状态或无机物作用的是“分解者”。

53. (前略) さらにそれを食物とする「第三次消費者」が一〇センチメートル以内であり，最終的な大型の「消費者」である一〇メートル以上のサメやシャチまで結ぶと非常にたくさんの「消費者」の段階がある。

如果最终以十米以上的沙鱼和鲛等大型消费者作为结束，就组成了一个有众多消费者组成的台阶。

通过对汉语译文的分析，我们可以观察到日语现象句译成汉语时的一些特点，下面我们进行归类分析。

### (1) 指示代词回指

句1, 7, 11, 13, 14, 18, 23, 34, 36, 39属于同类译法。日语原文是「～の（というの，という考え，という説，こと）が（，）～する」，译成汉语时采用分割式，以指示代词回指“……，这”的形式出现。之所以要这样翻译的其根本原因是因为日语与汉语是不同语系的语法，是语法性质不同的结果。以句1为例，日语的主语部分是「ふつうの人間の到達し得ないのが」，也就是说，「ふつうの人間の到達し得ない」这一动词短语加上「の」变为了一个具有名词性的短语，成为「体言」，而汉语却没有相同的用法，汉语重视的是语序，即使是动词也可放在句首作主语，用日语语法用语解释的话，即用言的动词可以放在体言的位置，不需要添加任何语言符号。另外，日语的格助词「が」，无论「が」前面的内容有多长，它都具有较强的制约力，统合力。第36句就是最好的例子，「が」前面的内容长达「しかし，そんなことよりむしろ，陸上ならばわれわれ自身がそれほどの困難もなくどこでも歩けるのにたいして，海の中は自由に歩くところか，相当な潜水装置を身につけても，海の世界のほんの一部しか歩くことができないこと」，而且中途出现多次「，」的停顿，但这并不影响「が」对前面一系列短语的统筹制约能力。然而汉语却不同，如果36句译成“而在海里，不但不能自由行

走，就是穿着相当不错的潜水衣也只能在大海世界的极小部分活动，是个很大的障碍”的话，“是个很大的障碍”这个部分与前面内容的语法、语义关系均不明确，整句内容产生混乱。但是如果在“是个很大的障碍”前加上“这”字就完全不同，“这”字起着回指的作用，对前面叙述的内容进行“总括”，使分散叙述的内容一体化，由此引出具有概括性意义的谓语、宾语，是对前面各短语、分句的总结概括。反过来再将这句汉语译成日语的话，「しかし，そんなことよりむしろ，陸上ならばわれわれ自身がそれほどの困難もなくどこでも歩けるのにたいして，海の中は自由に歩くどころか，相当な潜水装置を身につけても，海の世界のほんの一部しか歩くことができない。それが大きな障害となっている」。由此我们可以观察到二个根本不同的地方，首先，复指的指示代词“这”的前面可以用逗号，而日语却不能用逗号，只能用句号，这样一来，日语虽然从语法的角度讲没有异议，但是从文章整体上看，语言的表达有些不紧凑，「それが」中的「それ」具体指哪一部分也很不明确，成为一个难以理解的句子。汉语却不同，“这”的前面可以使用逗号，因为汉语的句号可以用于在表达一个完整的意思之后，也就是说在未表达一个完整的意思之前，复数分句之间都可以使用逗号。而日语不同的是，句号之前表停顿的逗号或顿号虽然也可以用作分句的停顿，但是停顿前相应的词要产生变格或添加其他成分，试比较：

汉语原文：

A 你要找的那个人已经回家了，他是两点走的。

B 我刚才买了一双鞋，那是中国产的。

日语译文：

A あなたが会おうとしていたその人はもう家に帰ってしまっていた。その人は2時に帰ったのだった。

B 私はいま靴を一足買いましたが，それは中国製です。

句A汉语是一句话，而译成日语时无法译成一句话，只能分成两句；句B可以像句A那样译成两个独立的句子，也可以在前句后加表顺接的「が」，再用逗号。这种标点符号的不同使用方法也是我们在分析文章句子时必须重视的一个方面。第二点，当日语将其分为两句翻译时，汉语的“……，这……”的“这”因为是回指成分，已经不是新信息，所以要译为「それは」，而不应译为「それが」。

反过来，把译为“……，这……”的这类句子中的“这”去掉的话，就成为一句意思模糊不清的句子。比如，句23“当然这些都还是靠孢子繁殖的低等植物，但为了能在陆地生存，已有了把水送进体内的管子，~~这~~是个很大的变化”。这样一来，什么“是个很大的变化”让读者难以理解，“这”的使用在此是不可缺少的。另外，句7，11，14，18都在“这”和“是”中间用了副词“就”，这也是一个值得关注的问题。汉语中副词“就”的用法很多，其中有一种用法是用在动词“是”的前边，表达一种肯定、确认的语气，表示主语就具备谓语所表示的条件<sup>5</sup>。例如，

汉语原文：

1. A 他就是我们的老师。  
B 这就是你要的那本书。

日语译文：

1. A 彼が私たちの先生だ。  
B これが君の必要としている本だ。or 君の必要としている本はこれだ。

相反如果不用“就”的话，

汉语原文：

2. A 他是我们的老师。  
B 这是你要的那本书。

日语译文：

2. A a. 彼が私たちの先生だ。  
b. 彼は私たちの先生だ。  
B a. これが君の必要としている本だ。or 君の必要としている本はこれだ。  
b. これは君の必要としている本だ。

译成「が」还是「は」要看重读音放在什么地方，Aa和Ba都是句首“这”重读时的译法。我们进一步观察对比它们的语用特点，

汉语：

A 他就是我们的老师。

新信息 旧信息

他是我们的老师。

新信息？ 旧信息？

重音在“他”时“他”是新信息，否则就是旧信息。在具体文章中要结合上下文判断。

B 这就是你要的那本书。

新信息 旧信息

这是你要的那本书。

新信息？ 旧信息？

重音在“这”时“这”是新信息，否则就是旧信息。在具体文章中要结合上下文判断。

由此可见，如果不用副词“就”，叙述的焦点有可能是主语，也有可能是宾语，然而在动词“是”的前边加入副词“就”的话，叙述的焦点无疑是“就”前面的内容，这部分内容译成日语时或者译为「～が」，或者将叙述焦点放在日语「～は」的后面（如1.B）。

## （2）语序的变化 SV→VO 等

这样的句子占大多数，句9, 15, 16, 17, 20, 21, 26, 27, 29, 30, 31, 32, 35, 44, 45, 48, 49, 50, 53都属于同一类型。其中句15, 16, 29, 30, 35, 45, 48, 50译成汉语时都是“有”字句，也就是说，日语的「～がある」中的「～が」的部分译成汉语时，变为「ある」「有」的宾语部分。“有”字句是汉语语法中的一种特殊句式，“有”是非动作动词，不表示动作行为，其基本意思是表示“领有”、“存在”<sup>5</sup>，被认为是动宾谓语句的一种。范晓（1998）<sup>6</sup>对“有”字句的语用结构进行了深入的分析，认为“有”字句的表达重心分两种情况，“在‘有’字句的基本式里，表达重心一般在后段上即宾语上，如‘李老师有丰富的教学经验’一句里，‘丰富的教学经验’是表达的重心。在‘有’字句的延伸式里，表达重心一般在后续部分的词语上，

如‘我有责任帮助他’一句里，后续成分‘帮助他’这个动宾短语是表达重心”。这里讲的是一般“有”字句型，至于对表示对比的“我有字典，他没有字典”等句子要另当看待。表达重心是指一句话中的表意的重点，是语义的中心。不同句类的焦点出现位置会有一定的差别，一般认为，汉语陈述句中的焦点通常出现于句末位置，因为陈述句通常已知信息在前，引出话题，而新信息在后，是整个陈述的焦点。正因如此，像日语中类似句48「地球と比較的よく似た星が二つある」这样的句子翻译成汉语时，会将日语原文中被认为是表达重点的「地球と比較的よく似た星が二つある」这一部分放在“有”的后边，成为表意的焦点。这也是因为汉语里没有像日语「が」这样的格助词的缘故。同样，句9, 26, 27, 31, 32, 44, 49, 53虽然不是“有”字句，但是也采取了SV（日）→VO（中）的译法，将S（が）的部分移至V之后，使其成为表意的焦点。另外，还有一种句型值得注意，句32「（前略）サカナの群れにいろいろの反応や混乱が生じる」。译成汉语是，“（省略）鱼群中就会产生各种各样的反应和混乱”，这与句3, 30都是同一类，归为“存现句”。存现句也是汉语的一种具有代表性的句子，是叙述或说明某处或某时存在、出现、消失某些人或事物的句子。多年来，语法学家对存现句作了大量的研究，目前还存在不少分歧；传统语法强调主语的施事性质，因而把存现句分析为倒装句，即施事后置句，把句子前段的处所词语和时间词语分析为状语，认为存现句是“状语+谓语+主语”的变式句。现在，一般的论著都把存现句分析为主谓句，即句首处所词语或时间词语做句子的主语，相对的后段就成了宾语，这样存现句就分析为“主语+谓语+（状语+宾语）”。张斌（2000）在阐述存现句的语用作用时指出：“存现句的中段和后段是述题，是新信息部分，前段是主题，是已知信息部分，其中后段是新信息的重点，即焦点部分，所以后段往往是无定的，也是不可缺少的。”还有一种不同的见解，刘和民（1981）在谈到汉语存现句和日语句型的问题时认为：“存现句动词后面的体词不仅词序同宾语一样，它对动词（谓语）的依附关系也是无法否定的。但是从语义结构来说，它毕竟是施事主体，这与宾语完全不同。这两方面结合起来，这类词的成分还是认定为补语，较为妥当。至于有字句中‘有’后面的体词是宾语，这是没有争议的”。王福祥（1994）<sup>7</sup>从话语语言学的角度分析认为，存现句句首的介词短语是状语，谓语后面的部分为主语；其中状语为主题，表示叙述的出发点，谓语加主语切分为述题，表示叙述的核心。范晓（1998）在主题、述题部分的切分方法上与王福祥意见一致，但他认为除了存在句里的“有”字句、“是”字句、无动句的前段分析为主语外，其他的存现句的前段应分析为状语，谓语动词后面的部分应分析为宾语。范晓认为，述题（谓语和宾语部分）里后段的名词性宾语成分是焦点，焦点强调“存现”于处所的主体事物是什么。也就是说，像类似句32这样的「いろいろの反応や混乱が」这一部分在日语中是以「が」的形式出现的现象句，提供的是新的信息，可视为叙述的焦点。所以，译成汉语时由日语的主语位置变为汉语表语义重心的述题位置。另外，句21译成汉语时也发生了较大的变位。原文中「が」前面的部分「つまり岸に近いところがいちばん浅く，岸か

ら遠ざかるにしたがって深くなり岸からもっとも遠い中央の部分がいちばん深くなっているの」是叙述的重点,新信息的内容。译成汉语时,以“即离岸近的地方最浅,随着远离岸边也就变得深了,离岸最远的湖中心通常是最深的”的形式力求达到与原文同等叙述力度的效果。具体讲,将原文中的「岸からもっとも遠い中央の部分が」放到汉语译文中全句主语的位置,将「いちばん深くなっているのが」放到谓语部分翻译,以达到叙述重心的效果,而对原文中的非叙述重心的谓语部分「ふつうである」放到谓语部分之前,作为状语处理。

### (3) 关联词语及其他成分的添加

句4, 6, 14, 16, 28, 37属于这类句子。句4的添加部分是“正是因为……才……”,句6是“有”,句14是“也”和“就”,句16是“是……的”,句28是“一个……”,句37是“是……的”,下面逐句分析。句4的“因为……才……”这是汉语里常用的一种表示因果的关联词语,“因为”是连词,多用于偏句,说明原因,“才”是关联副词,用于正句,说明所产生的结果。译成日语为「～なので, ～だ」「～ために, ～だ」。汉语中把表示原因的偏正复句分为说明因果句和推断因果句,其中句4这样的句子属于说明因果句,它与推断因果句的最大不同是说明因果句正句说的是已实现的事实。一般认为,偏正复句都是由两个部分组成,这两个部分之间在语意上有偏正或主从之分,正句是句子所要表达的基本意义所在,是主要的,偏句是限制修饰正句的,是次要的、从属的,所以偏正复句也称为“主从复句”。也就是说,偏正复句的叙述焦点、信息中心无疑在主句上。涉及到句4,按常理讲其表达中心应在“才使海洋得以存在”上。但是,事实上无论从上下文还是从单一的句子看,句4的表达中心并不完全在主句上,从句的“正是因为地球按现在的轨道运行”也是叙述的焦点。其原因是“因为”前面使用了“正是”,“正”是副词,起到加强肯定语气的作用,“是”是动词,既可以说明原因,也可以起到加强肯定语气的作用。“正是”译为日语是「正に(ちょうど)～である」「正にその通りだ」。句4的日语原文「こう考えると,地球が現在の軌道を持っていることが」的信息焦点是「が」以前的内容,译成汉语时因为添加了“正是”,使得原本不能成为叙述焦点的从句也成为表达的重心。虽然比日语原文的语气要强得多,但使其更加接近日语的原意。句6的添加部分是“有”,但它不属于“有”字句。“有一种说法是”是兼语句,在这种句子中,一般认为“有”的宾语(即兼语)多表示存在的人或事物,兼语的谓语说明或叙述描写兼语。这类兼语句中无主语,即“有”的前面没有主语的句子更为常见。列举其它一些类似的汉语句子,我们从汉译日的角度进一步观察它们的特点。

汉语原文	日语译文
A 古代有个诗人叫李白。	A 昔李白という詩人がいた。
B 有只狼跑过来了,你看见了没有?	B 狼が一匹こちらに走ってきたんですが,見かけませんでしたか。
C 这之后,又有几个人来拜访我。	C その後,今度は何人かの人が私を訪ねてきた。



D 有个日本人心眼特别好。

D 非常に親切な日本人がいた。

这些句子都有一个共同点,就是“有”后面的兼语部分(“有”的宾语,后一部分的主语)译成日语时均成为带「が」的主格主语,而且这类句子用「は」去替换「が」也是不妥的,不恰当的。由此看来,句6中“有”的使用,使“有”后面的兼语部分也成为了表达的重心,叙述的焦点。再来看句14,有关“就”的用法及作用已在前面分析过了,就不重复了。日语原文「波」的后面使用了「が」,将重点放在了主语。那么译成汉语时,译者添加了副词“也”。“也”是副词,一般认为译成日语的「も」,而语法文章学将它看作为一种「题目的提示」,并将这样的句子划分为与「は」等同的「判断文」之中。句16是在谓语部分添加了“是……的”,这是一种表强调语气的句式,在此强调的是“是……的”中间的部分,“相当的大”这一部分成为叙述的重心,谓语部分对主语来说是起解释说明作用的,“是”和“的”都表示语气,这里表示的是笔者的一种肯定的态度。相反把汉语的译文看作原文反过来译成日语的话,就变为「地球上的海水を引っぱる力だけに關していえば,月の引っぱる力は遙かに強いのである」,成为判断句。句37的译法也是大同小异,只是还添加了“可以看出”,使得“后者是相当大的”的部分变为“看出”的宾语短语,成为「後者の方がはるかに大きいと思われる」,是语法文章学中所说的「述語文」。句28是添加了“一个”,译为日语的「ひとつ」「ある」,汉语中名词前添加类似“一个”等的句子、或是日语原文虽然没有,但是译成汉语时需要添加的句子较多,也许不被认为是一种特殊或强调。然而,仅就句28来讲,如果我们将译文的“一个”去掉的话,句子的语气及表述重心就会发生一些变化,成为“(省)当长到十四厘米时,一个有完全统制的鱼群就形成了”,使“有完全统制的鱼群”这一部分变为已知信息,表达的重心部分无疑放在谓语部分。但是,如果添加上“一个”,就可以使“有完全统制的鱼群”这一部分也视为表达的重心。

#### (4) 零记号

这类句子占绝大多数,句2,5,10,14,16,19,24,25,28,33,38,42,43,46,47,51,52均属于此类,总共17句,数量上看仅次于第(2)类。这类句子的共同点是,译成汉语时不但语序上没有变化,而且也没有添加任何词语,日语「が」的作用在汉语文章中自然是无从体现。

### 三 日汉现象句在文章中的具体作用

我们分章节进行分析。第1节的小题目是「なぜ海があるのか、ということがまず謎」(“为什么会有海”,这首先就是个谜),日语原文一共有21个句子,6小自然段。其中现象句有二个(句1,2),句1出现在第3自然段的最后一句,恰是文章的中间部分,句2是文章的结尾句。文章第1段首先描述了大海的千变万化,第2段是从平面对大海进行观察:大海无边无际,人们无法想像海的对面会有岛屿和大陆的存在;第3段是引导读者对大海进行垂直观察,



其结果只能达到10米左右,作者以句1的「ふつうの人間の到達し得ないのが海をいつそう不思議なものにする。」(再往下)一般人难以再到达,这使人对大海更加不可思议)这一现象句的表达形式将文章的叙述焦点放在「ふつうの人間の到達し得ないのが」上,如同在一个平面上拱起了一个小山坡,成为该节的起伏点,突出了叙述的高潮。与日语比较,汉语虽然没有像「が」这样的语言符号,但是译文中指示代词“这”的回指用法,也起到了同样的强调效果,从文章整体上分析不难断定该句是整节的叙述高潮。句2中的「まず,海の存在そのものがもっとも大きな謎として浮び上がってくるのである。」(首先,大海的存在本身就会作为一个最大的谜浮现在我们脑海里),这是第1章节的最后一句。对此,永野先生指出<sup>1</sup>「現象文の書き納める場合は,事象を事象としてありのままに述べることによって文章をしめくくるわけである。すなわち,新事実の提示によって主格主語をきわだたせ,盛り上がりをもたせるのである。そのため,叙述の流れが引き締まり,緊張感が持続したまま結末がつけられることになる」,永野先生实际上是从「言語過程説」<sup>8</sup>的角度作出的以上分析。永野先生进一步指出「現象文の書き納めは,筆者の脈絡では完結をつけたわけであるが,読者としては新しい事態を提示されたことにもなるのである。(中略)現実の事態がまぎれもなくそこにあるという結末である」。句2恰是验证永野上述理论观点的最好实例。但是,这句话译成汉语时,并没有添加任何词语,我们通过上下文对其进行进一步分析;一般认为,该句的主语是“大海的存在本身”,“一个最大的谜”是动词“作为”的宾语,是“浮现”的主语,所以是“兼语”。另外,句中的“本身”以及“就”这两个地方也应该是我们关注的焦点,“本身”的使用起到了对“大海的存在”的强调作用,如果没有“本身”这二个字的话,主语部分的表达力度自然就会减弱。我认为这里的“本身”可以看作是对前面“大海的存在”的一种回指强调,后面的“就”与前面的“一”对应,使“就”前面的主语部分与谓语部分产生了距离和停顿,“就”后面的“会”的使用,加强了笔者对“作为一个最大的谜”的肯定语气。所以,该句汉语译文中的表达重心应被看为是“大海的存在本身”以及“作为一个最大的谜”这两个部分。这样分析的话,“大海的存在本身”是整个文章的叙述主题,“作为一个最大的谜”是叙述的焦点部分。像这样以现象句结尾的文章起到了扣题(“为什么会有大海,这首先就是个谜”)的作用。第2节的小题目是「海は地球にしか存在しない」(海洋只存在于地球之上),共17个句子,4个小自然段,2个现象句。这节中的两个现象句用在句中(句3)和句尾(句4),日语使用「が」,将焦点放在「が」以前的部分,起到了对新事物、新现象焦点叙述的作用。译成汉语时用的是存现句,将日语的叙述焦点部分移至谓语之后,从而达到与原文同样的叙述效果。文章结尾现象句的使用起到了归纳总结的效果,作者强调的是「地球が現在の軌道を持っていること」这一部分,也就是说,「海の存在を可能にしている」是因为「地球が現在の軌道を持っていること」。汉语添加了“正因为”这三个字达到了同样的叙述效果。在以判断句为主要基调的论说文中,类似这样用于段落句尾的现象句

不仅起到了将焦点放到主语部分的作用,也产生了较有力的结尾作用,使其与下一章节的界限更加鲜明。第3节的小题目是「寒さ暑さを決めるのは海流である」(海流决定冷热),原文共17个句子,3个小自然段,现象句有两句,一个出现在句中(句5),一个出现在句尾(句6)。句5出现在比较句中,重点突出「太平洋岸のほう」这一部分,并不是新事物的凸现,也不是带有总结归纳性质的句子,译成汉语时并无任何特征。结尾句的现象句的使用效果与前面两节不同,没有归纳总结和扣题的意图,只是用「が」对前面长句起着总括的作用,在整个文章中是“紧急停车”的效果。译成汉语时,采用了倒置法和兼语式,起到了与原文同样的表达效果。第4节的小题目是「最初,海はどのようにしてできたのか」(最早的海是怎样形成的),原文17句,4个小自然段,2个现象句。这两句均用在文章的中间部分,句7出现在第2小自然段的结尾,这句是与该自然段的开头呼应,是本自然段的归纳总结,译成汉语时添加了指示代词“这”以及带有强调肯定语气的副词“就”,从而达到同样的效果。句8在原文中也是一个核心句子,它不仅是该段落叙述的终点,而且为下一段的叙述内容设定了新的题目,从文章结构上分析,下一段的始句「この地球をとり巻いた厚い水蒸気の層は,(後略)」的判断句的使用是承接上一句的结果。这句译成汉语时没有什么特殊处理。考虑到前面已经作过详细分析,所以从第五章起,我们仅就各句在文章中的作用进行总结和概括。第5节的小题目是「海底は動き,そして大陸も移動している」(海底在运动,大陆在漂移),共16个句子,3个小自然段,5个现象句。句9用在句首,原文以现象句的形式提出了新事物,将焦点放在了「が」以前的部分,而译成汉语时将其移至谓语之后,起到了同样的叙述效果。句13用在整个章节的句尾,像这样以现象句结尾的日语文章,给人一种“急刹车”的感觉,但是比起以判断句结尾的句子来讲,它给人一种干脆利落的印象,给读者留下了对新事物、新信息思考的余音。这句译成汉语时,以“指示代词回指”的手法达到了与原文同样的效果。句11用在文章的中间,汉语以添加副词“就”起到了对主语的强调,但同时也加强了对“是”后一部分的肯定作用,似乎比日语原文口气要强。句10用在第1自然段的最后,汉语把原文分成两句翻译,叙述焦点发生了变化,用日语语法用语解释的话,是将主格主语变为主题主语。句12用在第3自然段的开头,这是一句存现句,与日语原文一样达到了对新事物、新现象的焦点叙述。第6小节题目是「波は前に進むのではない」(波浪并不向前运动),共14句,3小自然段,2个现象句。句14出现在文章的正中间,是单纯为强调「が」主语部分的句子,汉语译文添加了副词“也”和“就”,加强了对主语的焦点力度。句15是本节的结尾句,汉语译文采取的是先总述后分述的方法,也达到了对该章节强有力的概括效果。第7小节的题目是「海を引きあげる月の怪力」(月亮吸引海水的“怪力”),共11句,3小自然段,3个现象句。句16在句首,句17是紧接着16句,句16前一部分中“有”字句的使用将其焦点放在了“有”后面的部分,与日语原文表达效果相同,后半部分使用了“如果……”这一偏正复句,将焦点放在了正句的“月亮的吸引力是相当大的”上面,也同样在文章中起到了凸现、归纳概括

的作用。句17紧接着句16,是第2自然段的首句,将「～知られている」提到句首并添加了逗号,译为“我们知道,……”,把「～ことが」的焦点部分放在宾语部分,使其成为叙述焦点。句18的「これが満ち潮で,～」在以判断句为基本格调的文章中,该句显得十分突出,如同文章中的一个小山坡,汉语译文中“就”字的添加使其达到了同样的效果。第8小节的题目是「わからないことだらけの海の底」(充满未知的海底世界),共14句,3小自然段,一个现象句(句19),原文为凸现「いまから二四〇〇年も前にギリシャの歴史家」这一新信息,使用了现象句,而汉语译文中找不到相同的有形标记,但是有一点应该引起我们的注意,译成汉语时将该句拆成了两句,使「ギリシャの歴史家」移到句首部分。第9小节的题目是「海の底から返ってくるこだま」(从海底返上来的回声),共15句,3小自然段,一个现象句(句20)。句20用于文章的中间部分,是文章的核心叙述部分之一。汉语采用“大体情况是,……”的译法,将「～ことが」的部分移到后面,加上前面逗号的使用,使其达到与原文同样的焦点表达效果。第10小节的题目是「いちばん深い海の底」(最深的海底),共18个句子,3小自然段,一个现象句(句21)。句21出现在文章开头的第二句,作者首先提出了湖泊的深度问题,并着重强调“湖中心是最深的地方”。汉语译文将原文的焦点叙述部分移至动词谓语之后,从而达到了同样的效果。第11小节的题目是「海から陸にあがった地球上最初の動物はなにか」(地球上最早从海里来到陆地的动物是什么),共16句,4小自然段,3个现象句(句22,23,24)。句22出现在第1自然段的第2句,用现象句提出了新事物,即“出现在了陆地上进行新生活的植物”,成为文章的第一个突出的要点处,译成汉语时使用了“存现句”,将焦点部分移至谓语之后,达到与原文同样的效果。句23出现在第1小自然段最后,不仅有总结归纳的作用,同时强调发生“很大变化的”具体内容。汉语译文使用指示代词回指的方式,对其进行了强调。句24出现在第3自然段的最后,作者有意强调“从海水生活变成呼吸空气中的氧气生活的最早动物”不是别的,而是“这些蝎子和多足虫的香延虫”。这句译成汉语时没有观察到任何变化或带有强调意义的语言现象。第12小节的题目是「はえなわ漁業から発見された謎の深海海流」(从延绳捕鱼发现的深海海流之谜),共17句,3小自然段,3句现象句(句25,26,27)。句25,26出现在第1自然段的中间部位,句25是为了突出新信息“美国调查船”,译成汉语时没有对其作特殊处理;句26的原文是为了强调通过调查到底弄清了什么,汉语采用的是将焦点部分移至谓语后的译法,达到了同样效果。句27出现在第1自然段的最后,强调在各大洋进行的大规模调查的结果内容,汉语译文采用的是与句26相同的手法。第13小节的题目是「魚の群れはどのようにつくられるか」(鱼的群是怎样形成的),共18句,4小自然段,2个现象句(句28,29)。句28出现在第2自然段的最后,不仅是对以上叙述内容进行概括的句子,也是扣题句,可谓全文的核心部分之一,汉语译文添加了“一个”,对“有完全统制的鱼群”这一部分进行了焦点叙述。句29出现在第3自然段的开头,它紧接着句28,焦点是讲具体的“本能”是什么,汉语译文不仅将具体“本能”的部分移至动

词谓语之后处理,同时将“本能”与具体内容分开处理,对宾语部分采取了先总后分的复指手法。第14小节的题目是「岩礁を舞台とする攻防の秘密」(以岩礁为阵地进行攻守的秘密),共16句,2小自然段,一个现象句(句30)。句30出现在第2自然段,这是对新现象进行情景描述的句子,汉语译文使用了“存现句”的形式,达到了与原文同样的效果。第15小节的题目是「サカナの群れをまとめる眼と鼻と耳」(统一鱼群的眼、鼻、耳),共16句,3小自然段,4个现象句(句31,32,33,34)。这4句都出现在文章的中间,句31的焦点是讲能看到的内容,汉语将其移至谓语之后翻译,句32是对自然情景的一种描述,焦点叙述是产生的“各种各样的反应和混乱”,汉语用的是“存现句”。句33的焦点是「これ」,汉语译文中没有观察到特殊的处理。句34的表达中心是“感觉器官”,译文中“这一”的使用对焦点部分进行了限定,达到了与日语原文同样的效果。第16小节的题目是「深海魚の食生活はどうなっているか」(深海鱼类的食物是什么),共11句,5小自然段,本节没有观察到现象句。第17小节的题目是「においの世界—深海で通用する武器は」(气味世界—深海里通用的武器是什么),共20句,4小自然段,一个现象句(句35)。句35出现在第2自然段的开头,核心叙述部分是具体的实验内容,以现象句来凸显该部分内容,汉语译文用的是“有”的无主句,将焦点部分移至宾语位置,并采取了后复指的叙述方法。第18小节的题目是「海への招待—秘められた幻想の世界」(对大海的邀请—隐藏着幻想的世界),共17句,3小自然段,2个现象句(句36,37)。句36出现在第1自然段的最后,有一种紧急停车的感觉,汉语译文采用的是先分后总的指示代词复指的手法。句37出现在第2自然段的开头,原文「後者のほうが」是其核心部分,汉语译文添加了“可以看出”这一动词结构,将焦点部分移至宾语位置。第19小节的题目是「海底資源にはどんなものがあるか」(海底资源都有什么),共12句,4小自然段,一个现象句(句38)。句38出现在文章的中间,原文的核心部分是「～することが可能なのが」,汉语译文虽然没有观察到有形标记,但是条件复句的使用,使“就能……”的部分成为表达重心。第20小节的题目是「人間は海底で生活できるか」(人类能在海底生活吗),共18句,3小自然段,2个现象句(句39,40)。句39出现在文章的中间,这是对前面叙述内容的总结和概述,也是第1自然段的论述高潮,作者的叙述焦点在具体“说法”的内容上,汉语译文使用的是指示代词回指的手法。句40出现在接近文章结尾的部分,叙述焦点是目前海底生活实验的现状,汉语译文将这个焦点部分移至谓语后边,并把它译为宾语的定语。一般认为,汉语修饰语部分的信息力度要大于中心语。第21小节的题目是「雲があり,雨があり,川があり,海がある」(有云、有雨、有河、有海),共23句,4小自然段,7个现象句(41,42,43,44,45,46,47)。句41出现在句首,作者的叙述焦点是地球上分布着“海洋和陆地”,是新事物的描述,汉语译文使用的是存现句,将焦点部分放在谓语后面。句42出现在第1自然段的结尾,句43出现在第2自然段的开头,这两句在汉语译文中都未能找到对焦点叙述的特殊处理。句44出现在第2自然段的中间,核心叙述部分是“陆地和海洋”,汉语将这一部分移至谓



语后面翻译。句45在第3自然段的开头,这句是该段的叙述总题,是新信息,汉语译文用的是“有”字句,把焦点部分放在谓语“有”的后面。句46,47在最后一段的结尾,叙述的焦点在“太阳巨大的热能”、“这些水”、“地球上以海为源的循环水”,在汉语译文中没有找到类似的有形标记。第22小节的题目是「大自然の法則が地球に海を与えた」(大自然的规律把海赋予了地球),共17个句子,5小自然段,2个现象句(句48,49)。句48是文章的起始句,作者用现象句提出新事物「地球と比較のよく似た星」,汉语译文使用了“有”字,突出了“两个星球”,译为“有两个星球与地球相似”。这句汉语反过来译为日语的话是「二つの星が地球とよく似ている」,与原文叙述焦点发生了一些变化,但有一个共同的焦点是“星”。句49出现在文章的中间,汉语译文将原文的凸显部分移至谓语之后。第23小节的题目是「生きかえった化石」(复活的化石),共14句,3小自然段,一个现象句(句50)。句50在第2自然段的开头,这是对新现象的描述,汉语用的是存现句。第24小节的题目是「海の生存競争はどうなっているのだろうか」(海洋里是怎样进行生存竞争的),共16个句子,3小自然段,3个现象句(句51,52,53)。句51在文章的开头,突出“绿色植物”,句52在第1自然段的结尾,带有总结归纳的作用,汉语译文中均未观察到类似有形标记。句53是结尾句的前一句,突出「非常にたくさんの消費者の段階」,是文章结尾的暗示。汉语译文将其移至谓语之后,作为宾语。

#### 四 结语

通过日汉现象句<sup>9</sup>在论说文中的对照研究,我们观察到日语现象句的很多句子在译成汉语时,由SV的形式转变为VO<sup>10</sup>的形式。由此我们不难看出,汉语从语义表达上看,一般句子的语义重心侧重于句子的后半部分。也就是说,从语义重心的角度看,谓语的表达重心大于主语,宾语和补语的表达重心大于谓语,定语和状语的表达重心大于宾语和补语。这与以句法结构为中心的主谓宾补定状不同,在句法结构中主谓的重要性应大于宾补,而宾补应大于定状。汉语被认为是话题(或主题)突出的语言,通常话题多出现于句首,一般是已知信息。但是,在偏正复句中,表达重心大多在正句,正句有时在前,有时在后;象“就”等一些虚词的使用,也可以使汉语表达重心的位置产生变化。在一般语言交际中,我们可以用语言重音的位置来判断语义重心的位置,比如:他是老师。这句话的语言重音可以有三种模式:①他是老师。(彼は先生です。)②他是老师。(彼の職業は確かに先生です。)③他是老师。(彼は学生ではなく、先生です),句①的语义重心在“他”,句②的语义重心在“是”,句③的语义重心在“老师”,这种实际语言交际强调重音遮掩了自然重音。然而,书面语中的情形却不同,书面语缺少口头语言交际的具体环境,读者需要从文章脉络、上下文的角度去判断各句、各段、各章节的表达重心及焦点。汉语中没有「は」和「が」这样的主题主语和主格主

语的有形标记,所以在分析具体文章时,更应重视文章上下句的表达连贯性及逻辑性。笔者认为,在分析汉语文章结构时,对主要表述对象的分析可以采取两个步骤进行分析,第一步从文章整体结构角度先分析句与句之间的叙述与被叙述关系,第二步再分析各句(包括分句)内部的叙述与被叙述关系以及具体表达重心部分和焦点部分。考虑到汉语句子结构的复杂性和多变性,应该将汉语文章作为一个整体进行层次性阶梯性的分析。

## 注

1. 永野贤(1986),《文章论总说》,朝仓书店,日本东京。
2. 郑高咏(2002),《文学论丛》VOL. 129,爱知大学纪要,日本名古屋。
3. 论说文,指汉语文章体裁中的“议论文”和“说明文”,相当于日语的「论说文」和「评论文」,即语法文章学概念中所指的广义的「说明文」。
4. 《海洋》(1988),郇双云译注,商务印书馆出版,中国北京。
5. 刘月华等著(1983),《实用现代汉语语法》,外语教学与研究出版社,中国北京。
6. 范晓(1998),《汉语的句子类型》,书海出版社,中国山西。
7. 王福详(1994),《话语语言学概论》,外语教学与研究出版社,中国北京。
8. 言语过程学说,日本语法五大学派代表人之一时枝诚记所倡导的一种语言本质观,该观点是通过对日本江户时代以前的日语学家的语言观点进行分析研究的基础上,总结出来的一种语言观点。其基本观点是,语言并不是人类外在的一种东西,而是人类行为的本身。
9. 这里所指现象句的概念不同于汉语存现句中的现象句,是日语语法文章学中的理论观点。
10. 有些学者认为是VC,也有些学者认为是VS,对此不加多议,采用多数学者VO的观点。

## 参考文献

1. 吕叔湘(1980),《现代汉语八百词》,商务印书馆,中国北京。
2. 刘月华等著(1983),《实用现代汉语语法》,外语教学与研究出版社,中国北京。
3. 永野贤(1986),《文章论总说》,朝仓书店,日本东京。
4. 王福详(1994),《话语语言学概论》,外语教学与研究出版社,中国北京。
5. 范晓(1998),《汉语的句子类型》,书海出版社,中国山西。
6. 张斌主编(2000),《现代汉语句子》,华东师范大学出版社,中国上海。
7. 郑高咏(2002),《文学论丛》VOL. 129,爱知大学纪要,日本名古屋。
8. 大野秀树(2008),『統辭論における中国語名詞句の意味と機能』,白帝社,日本东京。